

ウィリアム・ウォルターズ

## 『統治性：フーコーをめぐる批判的な出会い』

(2016, 月曜社)

(訳：阿部 潔・清水知子・成実弘至・小笠原博毅)

山 本 奈 生

本書はM.フーコーの遺した「統治性 (Governmentality)」という研究のコンセプトが、彼の死後どのように受容されてきたのか、そして「統治性」概念にいかなる意義があるのかを再検討しようと試みるものである。

著者のウォルターズはフランス思想の専門家ではなく学生時代は化学のトレーニングを受け、そこから転身して政治社会学、「国際統治性論」を専門とするようになったカナダ在住の研究者で、本書では特に政治社会学の観点から統治性というアイデアがどのように「使える」のかが問題とされている。フーコー自身はかつて自らを哲学者ではなく単なる思想家、あるいは社会的には「知識人」とカテゴライズされる役割を生きていると言明したが、事実フーコーの思想は哲学分野だけではなく、広く現代の社会学にも豊饒な知的源泉であり続けてきた。

本書ではフーコーの思想に内在して統治性概念が、他の「生権力」「主体化／服従化」「規律訓練型権力」などどういった関連にあるのかが検討されるのではなく、あくまでも統治性概念の広がり、そしてこれを用いる際の批判的観点に主眼が置かれているが、これが手際よく整理されて心憎いほどである。ウォルターズは統治性概念について決して体系だった理論ではなく、特にフーコー後期のコレージュ・ド・フラ

ンス講義録 (『社会は防衛しなければならない』『安全・領土・人口』及び『生政治の誕生』) を中心として引き出された断片的なアイデアであることに注意を促しながら、当該概念の批判的摂取を奨励する。

ここでの批判とは、フーコーの思想を分析的に理解するという意味での批判性だけではなく、統治性概念を用いようとするウォルターズや私たち自身に向けられた相互的なものである。「適用主義」「パノプティコン主義」を避けよと主張するウォルターズの言明は、私だけではなくフーコーから影響を受けた多くの研究者が、大学院時代に一度は経験したかもしれない「失敗」を想起させてくれる。

まずフーコーの著作はいずれも書物として面白い。そして講義録や『思考集成』も読みだすと、勢い彼の試みたことを自らの研究でも実施してみたくってくる。それは彼の研究が歴史的な出来事を論じているようで、その実は現代的な観点から「主体とは何か」「広義の権力とは何か」といったテーマを扱っているからであり、これはすぐさま臨床的な社会学やフィールドワークの成果を解釈する道具にも転用できるからである。

そこで私は、この現象は「パノプティコンの現代版である、いやむしろシノプティコンだ」

などといったことを書いてみたくなる。実際修士論文で、T. マシーセンの論文を意識しながらそのようなことを書いた記憶すらある。ウォルターズは、こうした「適用主義」を避け、統治性概念とその宛先となる研究テーマの間を幾度も往還しながら、両者の枠組みを常に揺るがせるようでなければならず、その上で統治性概念とフーコー思想の他の概念、例えば「系譜学」の手法を接合するよう推奨する。

さて本書の内容については、前半の第一章、第二章部分は手堅くまとまっているものの目新しい議論であるとは言えない。ここでは統治性概念とは何か、そしてこの道具を用いる際、例えばオープン・ソースのソフトウェアを更新する利用者のように、理論と使用者は相互関係でなければならないといった基礎的な共通認識に関する議論が展開されている。こうした論点については、日本では既に中山元『フーコー：生権力と統治性』（2010年、河出書房新社）が丁寧な註解を行っているところである。

第三章は政治社会学者ウォルターズの面目躍如というべきであり、日本ではまだ広く知られていない、国際関係論、政治学、ポスト植民地研究におけるフーコー受容の連座配置が丁寧に紹介されており参考になる。そして最後の第四章こそ、過去に行った「私の失敗」を想起しながら読むべき部分であり、統治性概念と特に系譜学のアイデアを、三つの具体的方針に分解しながら再構成することが試みられている。すなわち、一般的な「権力の家系図としての系譜学」に加えて、「対抗的記憶と再系列化」「忘れられた闘争と従属化された知」を再発掘する試みとしての系譜学がこれである。

武器を持ちながら逃走する、忘れられた、「汚

穢にまみれた」人々の政治／闘争を、移民管理や戦争、人口へと向かう統治性との関連で理解しようと試みるウォルターズの主張は、ここで分配をめぐる政治とは異なるところの、根源的な部分の政治とは誰が市民であり、そうでないのかをめぐる境界線の闘いであることを論じた、政治哲学者J. ランシエールの議論と接合しているように思われる。

シチュアシオニストは存在したとしても、シチュアシオニズムは存在しないように、フーコーから影響を受けた人々は数多いても、フーコー主義は存在しない。ウォルターズはこのことから出発して、「道具箱」としての統治性概念を分析しながら、同時にこれを用いようとする私たちの双方を常に批判せよと主張する。そうすることで私たちは、現代日本における不条理と社会的排除に対して、ニヒリズムではなく前を向いて立つことができる。

最後に、本書を出版した月曜社はいわゆる小規模版元であるが、エルンスト・ユンガーの著作群やポール・ギルロイの『ブラック・アトランティック』など、社会学徒が注目すべき作品を多く出版している。京都においてもこのように意欲溢れる小出版社は多くあるが、「もうすぐ絶滅と言われる紙の書物」を粘り強く支える編集者と著者らの作品リストを時系列で眺めてみると、出版社もまたウォルターズの方法と同じように、「対抗的記憶」と「忘れられた闘争」に寄り添って政治的なものの境界線に挑戦し続けていることに気づかされる。

（やまもと なお

社会学部専任講師）